よきことを、よきひとへ。
被災地復興に取り組む人のための業界新聞
http://www.rise-tohoku.jp/

発行所　NPO法人 HUG
〒151-0053　東京都渋谷区代々木 2-10-9-8F
http://www.h-u-g.jp　e-mail: info@h-u-g.jp

東北復興新聞

無料　第30号
月1回　発行
創刊　２０１２年(平成24年) 1月16日月曜日

２０１３年（平成25年）11月27日　水曜日

特集 4－5面　はばたく！高校生

2面　南三陸町議会議員 後藤 伸太郎さん
リーダーズインタビュー
防災教育と一体となったまちづくりを実現する

3面　ソウルオブ東北
提案型の支援で三陸をブランディング

6面　宮城県東松島市 北原ライフサポートクリニック
東北のいま（フォトエッセイ）
自然と笑顔で健康寿命を長く

7面　宮城県女川町
コバルトーレ女川の「スポーツコミュニティ構想」

岩手県大槌町

まちづくりに参加の手応えを

複数団体が連携し行政と住民のパイプ役に

岩手県大槌町で、復興まちづくりへの住民参加を促そうと新たな活動が始まった。同町の住民まちづくり運営委員会は、11月より文化祭と称した住民会議を開始。すでに2回開催している。復興計画を元に町の復興事業が動き出している中、そのスピードを落とさずにいかにして住民参加型のまちづくりを実現するのだろうか。

11月3日に開催された第1回「住民まちづくり文化祭」には、町内外から180名が参加。大槌町のまちづくりに関して活発に議論が行われた。会議の中で参加者が書き込んだシートには、住まいや産業、医療や教育など幅広いテーマにおいて、各自の実現したい町のあり方が書き込まれた。

この文化祭の発起人は、住民まちづくり運営委員会代表の阿部敬一さん。町では、震災後に住民会議を重ねて復興計画を策定し、その後も行政主導で何回も会議が行われてきた。しかし時間の経過につれ住民の関心は低下。まちづくりへ参加するのはごく一部に限られていると危機感を募らせ、地域の複数の個人、団体へ声をかけ、改めて住民主導のまちづくり会議の開催に踏み切った。運営委員会には地域の婦人会会長や郷土芸能の団体の代表、漁師や高校生まで肩書き、年代とも幅広いメンバーが集まった。

第1回住民会議の様子。会議と呼ぶと人が来づらいと「文化祭」と名づけた

「復興計画にただ反対したい訳でも行政を批判したい訳でもない。住民の参加を促す場が必要だった」と言う阿部さんらの動きに行政側も協力。運営委員会の打ち合せには町役場の担当者も加わり、第1回の文化祭には碇川豊町長も参加、町は後援の形を取った。

フィードバックと通訳を

今後さらに住民参加を促して行くにあたり、住民のレベルを上げる必要があると阿部さんは強調する。復興計画をしっかり理解していない住民も多いため、根拠が曖昧な噂に翻弄されてしまうようなことも。阿部さんは2011年の復興計画策定時には地区の代表を務めていたが、勉強する時間もなく議論が進んでしまったことへの反省もあると言う。

そこで今後の施策としては、住民のまちづくりに関する理解を深める勉強会を計画。勉強会といっても専門家に話してもらう形だけではなく、事前に住民側から役場へ質問を投げるように促しつつ、その回答をもらうための場とする。委員会が間に入ることで、住民からすると質問のフィードバックを得られ参加の手応えを感じられ、行政からすると住民と話す際の通訳の役割を担ってもらえるようになる。

委員会の強みはメンバーの幅が広く、地域の各団体のキーとなる人間がいることだ。地域の代表性を強め、パイプ役として行政とつなぐことができれば、復興のスピードを緩めることなく住民参加型のまちづくり実現に近づくのだろう。

委員会メンバーが連携して幅広い世代、所属の人々の参加を実現した

数字で見る復興進捗状況

■復興まちづくり※1

・防災集団移転促進事業（工事着手）
119 地区
0　3県・334地区

・土地区画整理事業（事業計画認可）
32 地区
0　3県・46地区

災害公営住宅整備事業（福島除く・工事着手）
11,483 戸
0　2県・21,929戸

■がれき処理※2

岩手県	74.8%
宮城県	88.2%
福島県	56.6%

0　100

※1 復興まちづくり　9月25日時点 復興庁発表
※2 がれき処理　8月31日時点 環境省発表

この陸前高田の町と一緒に、
明日へ向かうことを誓うホテルになる。
どんな困難にも負けない、
強くて幸せな結婚を誓うホテルになる。
そして、人が人を想う気持ちを
大切にできるホテルになることを誓います。

感謝の想いを胸に。
キャピタルホテル1000、
2013年11月1日(金)再開しました。

キャピタルホテル1000株式会社
岩手県陸前高田市高田町字長砂60-1
Tel：0192-55-3111　Fax：0192-55-3500

リーダーズインタビュー

若い力で南三陸町を変革。防災教育と一体となったまちづくりを実現する

Q. 圧倒的に若い町議会議員になられました

町議会議員の中で私は唯一の30代、他の15名の議員は皆20歳以上はなれています。南三陸町の選挙は親戚が多い人が当選するいわゆる田舎の選挙。慣例である街宣車も出さなかったため周りからは無理だと言われましたが、自身の考えを愚直に訴えました。それが結果につながったこと、そして若い人だけでなく70歳80歳でも強く共感頂けた方が多かったこと、嬉しく思います。

Q. 選挙戦では何を訴えましたか？

一番は、防災教育をまちづくりと一体として行う必要性です。私は子供の頃、海から30秒の家に住んでいましたが、地震が起きたら高台に走って逃げるようしつこく言われ続けてきました。災害大国に暮らしこの震災を経験した我々は、100年先の命を守るためにも、こうした教訓を風化させては絶対になりません。

例えば今、元々防潮堤があった場所に公園を作る案が出ています。ここをただキレイに整備されたものにするのではなく、震災の爪痕や復興のまちづくりの経過を形として残し、体感できるものを作ろうという話をしています。様々な形で防災教育を充実させ、またそれを外に発信し、「防災を学ぶなら南三陸」と言われるような町にしたいと考えています。

Q. まちづくりへの若い世代の参加はいかがですか？

しがらみが多い町です。昔からいる声の大きい人の意見が通ってしまうことも多々あり、若い人が声をあげづらい側面も実際あります。でも、私は初の選挙を自分なりのやり方で勝ち、圧倒的に若い議員になりました。他の若い世代に「若造がこんな事やってもいいんだ」という雰囲気が生まれ始めています。

母はよく蛇口に例えて言いました。「水源（言いたいことや想い）はいっぱいある。それを吐き出す蛇口が無いだけだ」。私は1つの蛇口となり、若さを武器に議会でも発言、行動していきます。町の若い世代は想いを持っています。身近なものからでよいので、それを外に出していって欲しい。今はチャレンジを応援できる雰囲気が町にはあります。

Q. これからどのような町を目指していきますか？

被災地という看板をいち早く外せる町を目指します。町民一人ひとりが自身の道を決めて、一歩前に進み出す。その時、例え家や物質面ではまだ厳しい状況にあったとしても、その人は被災者ではなくなります。

そのためにも、とにかく目に見える形でそれぞれの復興事業を進める必要があります。少しずつでも展望が見え、町が動き出している感を出すことができれば、そこへ近づくことができると考えています。

後藤 伸太郎（ごとう しんたろう）さん
宮城県南三陸町 町議会議員

【プロフィール】
東京での劇団員生活の後10年に南三陸町へ帰郷。震災後は避難所や仮設住宅の自治会を先導。13年10月町議会議員に立候補し最年少で当選を果たす。1979年生まれの34歳。

復興庁から国会へ年次報告

国の動きを理解することで民間の役割を見つける

復興庁は12日、「東日本大震災からの復興の状況に関する報告」を国会に行った。この報告は復興基本法に基づき、復興庁が廃止されるまで毎年行うもの。網羅的に復興を捉える良い資料であり、今回はこのレポートについて考察したい。

レポートでは復興を、被災者支援、地域づくり、産業・雇用、原子力災害の4つに分類し、その進捗をまとめている。住宅や高台移転を含む公共インフラの整備や、産業用の施設復旧、原子力災害関連では避難指示区域の見直しが完了など、いずれの分類においてもハードの事業における成果が目立つ。

一方、課題としては地域コミュニティの強化や産業・商店街の復興、風評被害の克服など、ハードの上に乗るソフト的な取り組みが並んでいる。行政として、何が得意で何がそうでないのかが明確に見て取れる。

この課題の対応策として進められている政策が「新しい東北」だ。交付金を活用して被災市町村の復興を支えてきたが、限界もある。そこで、ソフト分野に取り組む民間の動きを積極的にサポートすることで、行政が不得意な課題を補おうとしている。そのために今年度は66のモデル事業を選び、9億円を拠出した。また「WORK FOR 東北」を通じて、主にソフト分野の取組みに対して民間人材をつなぐ取組みを進めている。

12月からは『「新しい東北」官民連携推進協議会』が設立され、情報面での連携も進められる。行政の事業を民間に委託する事例は多いが、事業を生み出すための枠組みを創ろうとの試みは画期的と言える。今後に期待したい。

ハード整備が進み、ソフト面での課題解決が求められる今後の復興において、民間の力の重要性がますます高まっていく。こうしたレポートから国の状況を理解し、そこから自らが果たすべき役割を考える。国に過度に期待するのではなく、逆に民間から行政を活用するような動きが生まれていくことが期待される。

（文・図／RCF復興支援チーム・藤沢烈）

分野	復興の現状	残る課題
被災者支援	・仮設住宅から恒久住宅への移転が開始 ・高台移転や土地のかさ上げ等において事業計画が策定完了、順次着工へ	・コミュニティの弱体化、孤立問題 ・福島における住まいの復興
地域づくり	・河川対策、下水道、水道施設、がれき処理事業は85%以上着工 ・交通インフラは70%以上の復旧完了	・住宅再建 ・復興まちづくりの加速化 ・生業の再建
産業・雇用	・鉱工業ー生産指数はほぼ回復 ・農業ー津波被災農地の約63%が営農再開可能 ・水産業ー水揚げ数量は、被災前の約70%まで回復 ・観光業ー全国水準を下回るも宿泊施設の宿泊人数は改善傾向 ・雇用ー3県とも有効求人倍率が1超え	・雇用のミスマッチ ・産業や商店街の復興
原子力災害からの復興	・避難指示区域の見直しの実施 ・原子力損害賠償支援機構法の改訂 ・94全ての市町村で除染実施計画の協議終了	・放射線による健康不安の解消 ・風評被害の克服 ・長期避難者に対する支援

お申し込み・お問い合わせ　JFA・キリン スマイルフィールド 事務局
0120-773-903（受付時間:10時～17時（土日・祝祭日を除く））　お問い合わせメールアドレス info@smilefield.jp
●開催日時：2011年9月～2013年12月末日（予定）日時は学校側のご都合に合わせて実施します。
●開催場所：小学校内（校庭や体育館など）●学校側の費用負担はございません ●ボールやコールなどは寄贈いたします
このプロジェクトは、「復興応援キリン絆プロジェクト」の一環として、子どもたちにサッカーを通じて笑顔になってもらいたいとの想いから、日本サッカー協会（JFA）とキリングループが協力し、岩手県・宮城県・福島県の小学校を対象にした巡回型サッカー教室です。
復興応援 キリン 絆プロジェクト
笑顔で結ぶ、人々、日本を。

2分でわかる！ NEWS ダイジェスト

10月19日～11月23日

政策

復興庁、震災遺構の保存を助成
復興庁は15日、震災遺構の保存に対する初期費用を国が負担する方針を示した。住民合意を前提に市町村ごとに1カ所を支援する。

第2回子ども元気復活金を配分
復興庁は、福島県内の子育て環境改善を支援する子ども元気復活交付金の第2回として、計34億円を県内23市町村に配分した。

福島全域、農林水産特区の申請へ
福島県は、県内52市町村の農林水産特区の認定申請において、国と最終調整に入った。県内全域の農林水産業の再生を促す。

生活・まちづくり

石巻線、15年春に全線再開へ
JR東日本は25日、JR石巻線で唯一運休中の浦宿ー女川間について、15年春に運転を再開し全線復旧させる方針を明らかにした。

石巻市、サン・ファン館が再開
宮城県石巻市で3日、震災後、休館していた宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン館）が2年8カ月ぶりに再開した。

名取市、初の集団移転事業
宮城県名取市下増田地区で28日、市内で初となる集団移転事業が起工した。162世帯分を建設し14年度内の入居を目指す。

野田村、県内初の借換地復興事業
岩手県野田村城内地区で31日、総事業費16億9400万円をかけた土地区画整理事業が着工した。借換地指定後の工事は県内初。

気仙沼市、災害公営住宅が初着工
宮城県気仙沼市南郷地区で7日、市内で初めてとなる災害公営住宅の工事が開始した。計165戸を整備し15年中の完成を予定する。

福島県、復興住宅410戸を建設へ
福島県で、郡山、いわき両市に整備する避難者向け復興住宅410戸分の計画が県議会で可決され、早ければ11月中にも着工する。

産業復興

大船渡市、初のかさあげ工事着工
岩手県大船渡市で25日、JR大船渡駅周辺で土地区画整理と津波復興拠点整備の2事業が着工し、市内初のかさ上げ工事が開始した。

復興庁、福島県で「結の場」開催
復興庁は、大手企業と被災地の中小企業を繋ぐ「結の場」を14年2月15日に福島県のコラッセふくしまで開催する。福島では初。

なみえ焼きそば、B－1GPで優勝
愛知県豊川市で開かれたご当地グルメのイベント、第8回B－1グランプリで、福島県の浪江焼麺太国が1位に選ばれた。

漁業

田老地区、アワビ加工場が完成
岩手県宮古市田老地区で22日、宮古市が大阪府から誘致した干しアワビの加工・販売最大手、神野商店の田老工場が完成した。

浪江町、諸戸漁港の復旧工事開始
福島県浪江町で12日、津波の被害を受けた諸戸漁港の復旧工事が始まった。約47億円を投じおよそ3年間で漁港全体を復旧する。

気仙沼カツオ水揚げ日本一へ
宮城県気仙沼市は気仙沼漁港の生鮮カツオの水揚げ量が17年連続の日本一となると発表。今期の取扱い量は2万2410トン。2位の千葉県勝浦漁港を大きく引き離している。

農業

亘理町、イチゴ選果場が完成
宮城県亘理町に26日、東北最大規模のイチゴ選果場が完成し、6日に今季初めて出荷した。今季は2600トンの出荷を目指す。

原発・放射能

南相馬市、避難指示解除の方針に
福島県南相馬市は、除染完了時期などを基に同市の避難指示解除準備、居住制限の2区域を16年4月に解除する方針を示した。

ソウルオブ東北

提案型の支援で三陸をブランディング

三陸×ワイン。意外性をコンセプトに商品企画

同プロジェクトは、キリングループから5000万円の助成を受け進められている

岩手県大船渡市および陸前高田市の水産加工会社6社からなる協同組合「三陸パートナーズ」が、三陸海産物をブランディングするプロジェクトを進めている。商品開発の監修は有名シェフの熊谷喜八氏がつとめ、9月に行われた「いわて物産品コンクール」では最高賞の県知事賞を受賞するなど、好事例として注目を集めている。

三陸地方の多くの水産加工会社は、震災の影響で取引先を失った。行政や民間からの様々なサポートで、設備などのハード面での再建を果たした後も、取引先が戻らずに苦戦している例が多い。こうした中で三陸パートナーズは、地域内で横の連携をしながら新たな販路開拓、そして独自の商品開発を目指そうと設立されたものだ。

その立ち上げを企画から全面的にサポートしてきた団体がある。NPO法人ソウルオブ東北。理事長の岡部泉さんは東京でブランディングや飲食店企画の会社を経営しており、震災後に同団体を立ち上げ、食をテーマに復興支援活動を続けてきた。本業のノウハウを活かして、地域の企業とともに新商品を開発する。産業復興へ向け今、各地で求められている支援の形と言えるだろう。

開発された商品のコンセプトは「ワインに合う三陸の味」。和のイメージが強かった三陸で意外性を狙った。商品は有名シェフの本格的な料理を、簡単な調理で楽しめるように素材とソースのセットで届けられる。加工技術をベースとして生まれた「キッチンデリバリー」というビジネスモデルだ。

一人で何役もこなす

岡部さんは、どのようにこの協業を実現したのだろうか。昨年夏頃から三陸沿岸の加工会社の訪問を開始した際、「設備は戻ったが何をつくってよいか分からない」と悩む経営者たちに出会ったのが始まり。商品開発経験が少なかったという各社に対して、岡部さんは「最初は、口で説明するよりカタチを見せるべき」と迫力の提案で最終形を見せたと言う。

ソウルオブ東北理事長の岡部泉さん（左）と業務統括の高梨和良さん。

加えて、企画やデザインだけではなく、東京でシンポジウムを開催して販売先とのつなぎも行った。どんな相手に売るのかを「見える化」したこと、販売先の反応が売れるという手応えにつながったことで、プロジェクトが加速していった。

そして何より強調するのは現地との信頼関係だ。繰り返し足を運んで会話を重ねながら関係を構築。「やっていて楽しいと思える関係でないと続かないですよね」と岡部さん。会議においても、日に日に活発な意見が出るようになっていったと言う。

地元との信頼関係をベースにしながら、圧倒的な提案力で牽引し、売り先づくりや時には商品に使う容器の値段まで調べたという岡部さん。一つの機能だけでなく、一人何役もこなしていくことがポイントだったようだ。外部からの支援者のあり方の一つの形と言えるだろう。

1～2年生の挑戦も歓迎！
復興を担う『学生』右腕インターン募集!
ETIC. アントレプレナー・インターンシップ・プログラム

▶被災地 × 教育支援！東日本大震災の被災児童にリーダーシップ教育を提供。
一般財団法人 教育支援グローバル基金（ビヨンドトゥモロー）

▶トレーラーハウス宿泊村「エルファロ」の第2ステージ“Elfaro café（仮）”の立ち上げ！
女川町宿泊村協同組合「エルファロ」

▶消費者と生産者・加工事業者・飲食・小売店を有機的につなげる『コミュニティ型バリューチェーン』を創る！
株式会社フレスコ

ETIC. インターンシップ・フェア 2014 SPRING　12.07sat-08sun 東京で開催！
ETIC. 特定非営利活動法人 ETIC.（エティック）〒150-0041　東京都渋谷区神南1-5-7　APPLE OHMI ビル4 階
TEL:03-5784-2115　FAX:03-5784-2116　E-mail: intern@etic.or.jp　Web: http://www.etic.jp/
etic インターンシップ　検索

特集

はばたく！高校生

「なにか したい」はいか にして「行動」へ変 わったのか

東北の高校生の活躍が勢いを増している。

旅行会社とともにツアーパッケージを企画・運営する団体、語り部活動を開始して観光協会と組んで町の名物の1つとなった団体、インターネット上で番組放送を続ける団体等々。いま東北では、数えきれないほどの高校生プロジェクトが生まれている。

学業も部活も受験もある中でも活動を続ける彼ら。その行動は、どのようなきっかけで生まれ、そのエネルギーの源はなんだったのか。そして行動を起こすことによって、彼らはどのような手応え、そして変化を感じているのだろうか。

映像を通じて東北の元気を日本へ、世界へ!

宮城県多賀城市
三品万麻紗（まあさ）さん

行動を起こしたきっかけ

「任せたい映像がある」の一言

TOMODACHIのプログラムで、去年と今年と2回アメリカに行かせてもらいました。去年は凄く刺激をもらって、こてんぱんにされたけど、それを跳ね返すところまではできなかった。今年2回目で、とにかく積極的に声をかけてみんなの想いを聞いて、自分の夢を語って。そしたらやっとやりたいことが見えてきて、そんな時に、TOMODACHIの映像を作っていた前田屋の前田さんから「任せたい映像がある」って声をかけてもらったんです。

エネルギーの源

夢があるから前に進める

私の夢は、映像や映画の制作に携わって、東北をそうした発信地にすることなんです。実は昔、転校などにより不幸な毎日が続いている時がありました。その時、映画に出会ってとっても救われたんです。メイキングを見たんですけど、たった2時間のために、こんなにも多くの人が携わっているのかと驚いて、その姿がキラキラしてて。私は生きる力を映画からもらいました。だから、映像を通じて誰かの幸せにつながるきっかけをつくりたいんです。

行動してみて

こういう人になりたい、を見つけました

きっかけをくれた人であり、制作の師匠でもある前田さんに出会った事が本当に大きいです。制作を学ばせてもらってるだけじゃないんです。電話1本で必要なメンバーを集めて、凄い映像をつくってしまうところ。石巻で映像制作会社つくろうとか、東北で映画祭やろうとか、私がやりたい!って思う事をさらっと言ったりするところ。こういう人になりたい、って人に、初めて会えました。だから後は前に進むだけです。1つ大きな作品を終えましたが、目指している所はもっと先。これからもどんどん作品を作り続けたいです。

活動情報

ラブ♡センPRムービーで東北の高校生を紹介

万麻紗さんが制作したのは、11月に開催された「ツール・ド・東北」のPRビデオ。東北で活躍する高校生たちが地元愛を叫ぶものでタイトルは「ラブ♡センー ツール・ド・東北 高校生ver.〜」。福島・宮城・岩手を自転車で旅するような形で、各地の高校生10組を紹介。「東北の一番の魅力は高校生。何度も会いにきて欲しい」と自身が話すラストは感動的。

高校生視点の市街地マップでまちの良さを再発見!

岩手県宮古市
村井 旬（じゅん）くん

行動を起こしたきっかけ

ビヨンドトゥモロウで感じた劣等感とあこがれ

震災当時は中学生でした。翌年から生徒会長をやったんですが、1年の任期が終わったとき何もできなかった自分がいました。そんな時に、ビヨンドトゥモロウという、東北中から高校生が集まって議論をするプロジェクトに参加しました。そこで出会った高校生たちは「僕は何をしたい」というビジョンを持っていた。メンターとして一緒に議論に入ってくれた経営者の方がとにかくカッコよかった。衝撃でした。劣等感とあこがれが混じったような、不思議な感覚。何かしようと強く思った瞬間でした。

エネルギーの源

とにかく宮古が、田老が好きなんです

なんで頑張るのかって、もう地元が大好きだってことでしかありません。震災直後、津波で何もなくなった地元（宮古市田老）の風景を呆然と眺めた時に「故郷を失うかもしれない」、と焦りました。みんなで通った通学路とか、部活で走った堤防が破壊されていて。そして、初めて自分がこんなに地元を好きなんだって気づいたんです。負けっぱなしじゃ嫌じゃないですか。大好きな地元のために、俺も絶対なにかやってやるぞって思うんです。

行動してみて

仲間と共に成長する喜び

自分の生まれ育った町を自分の手で再生するって、すごい大きな夢みたいなことじゃないですか。でも僕たちの意見に耳を傾けてくれる大人や、友人がプロジェクトの成功に向けて動いてくれる。東北の他の町でも、「私たちはこんなことをしている」って復興へ向けて頑張ってる仲間がいる。一緒に成長できることがすごく楽しい。みんなと会って話すだけでやる気がわいてくるんです。

震災後、何もできなかった時はやりきれない気持ちでした。でも動き始めて、自分の中に情熱が生まれた。やっと情熱を消化できる場を見つけたと感じています。

活動情報

ユースみやっこベース

語りと地元愛を行動に繋げようと、地域の中で学び・体験の場づくりを行う団体。13年2月の設立から、「高校生サミット」を毎月開催し、市内の高校生を中心にさまざまなテーマで「今私たちにできることは何か」を話し合っている。村上くんは、4月に行った復興をテーマにしたプレゼン大会で優勝したプランを基に、地域の魅力を盛り込んだ「商店街MAP」の作成にも取り組んでいる。
http://miyakkobase.jimdo.com/

農地を活用して町に人を呼び込む!

福島県いわき市
岡田健哉（けんや）くん

行動を起こしたきっかけ

何もできなかったとずっと残っていた

震災当時は中学生でした。自分が住んでいるところよりも被害を受けている所があるので、従兄弟と一緒にがれき処理の手伝いに行こうとしていたんです。でも数日後、遺体があったり大変だから来ない方がいいとなって結局行けなかった。何もできなかったという思いがずーっと残っていたんです。今年に入って何かしたいと仮設住宅をまわってみたりもしたんですが、自分でできることは見つかりませんでした。そんな時に農家の白石さんと出会いました。風評被害の大変さを聞いてショックでした。それと、心に残ったのは32歳の白石さんが「自分が最年少」と何度も言っていたことです。若者が少ないという福島の農業の未来を思った時、農業の復興に力になりたいと思ったんです。

エネルギーの源

周りの人たちからの刺激

正直、行動する中で大変なことは沢山あります。何かやろうとした時に人が集まらないことも。それでもやっていく中で、大人の人たちが「俺たちも頑張らなきゃな」って言ってくれたりすると、力になります。それと、他地域の高校生の頑張りも刺激になっています。周りも頑張ってるんだから、僕たちもやらなきゃって。凄いことはできなくても、とにかく行動しようと思っています。

行動してみて

大人の人たちへの感謝でいっぱいです

もう、感謝しかありません。やろう、って決めて仲間で話し合って動き出してから、本当に多くの大人の人たちに助けて頂いています。話し合いの場に参加させてもらったり、農地を貸してもらったり、まだ何もできてないのに。大人の人たちとのやりとりを通じて、会話が理解できたり意見を言えるようになったりと少しずつですが成長も感じてます。小さくても行動を重ねて恩返しができればと思っています。

活動情報

TOMODACHIファーム

いわき市にある農地を活用して、いわきの魅力発信や、耕作放棄地の活用を行うプロジェクト。風評被害と戦う地域の農家の力になりたいと、農家のお手伝いから活動を開始。市内の復興飲食店街「夜明け市場」におけるイベント集客なども行った。また農地を提供してもらい、宣伝を通して外部の人を呼び込み農業体験をしてもらうための企画を推進している。

インターネット番組で石巻を発信!

宮城県石巻市
木幡真人（まさと）くん

行動を起こしたきっかけ

たった30分の生む温度差

石巻の学校に通ってるんですが、僕の家は隣町の涌谷にあります。震災が起きて最初の1ヶ月、30分先では大変なことが起きてるのに、涌谷には全然情報がはいってこなかった。すごい温度差を感じたし、「伝える」ということの大切さを痛感しました。そういう思いがあった時に、仙台で大学生たちが自分たちの番組をつくって ustream で配信しているプロジェクトに出会いました。そこに通わせてもらった中で、その大学生の活動を支援していたメディアージという団体の方から「君たちもやってみる?」と言ってもらったのがきっかけです。

エネルギーの源

仲間とともにつくりあげる喜び

続けて行くのは本当に大変です。でも続けられてるいのは、仲間と一緒に何かをつくりあげるという喜びがあるからです。こないだは番組を見てくれている広島の高校生から連絡をもらって、彼らのやっている番組にビデオレターを送ったこともありました。こういう経験を仲間と共有できるのは本当に嬉しいです。あとは、南三陸町で語り部団体「まずもって」を立ち上げた田畑さんからの刺激も大きいです。全力で向かわなきゃ駄目だって、教えてもらいました。

行動してみて

続けられるかは、結局は自分との戦い

自分はリーダーだったので、みんななをまとめていかなければいけなかった。でもうまくできなくて、何度もへコんで。辞めてしまう人もいたし、「言い訳をしている」と言われたこともありました。すごく辛かったけど、毎回仲間やまわりの人たちに支えてもらいながら続けられました。いまは、少しですが自分に強くなれたのではと思えます。続けられるかは結局は熱意の差であり、自分との戦いなんだと思っています。

活動情報

くじらステーション宮城県石巻市

ライブ動画配信サイト「Ustream」で、インターネット番組を配信する高校生グループ。13年6月から6名でスタートし、現在は石巻の高校生有志に中学生も加わった約10名で活動している。60分の番組を月に2回放送するにあたり、企画、取材、番組準備、配信などすべて自分たちで行う。放送ではメンバーがマイクの前に座り、石巻の町の魅力と、石巻の高校生が復興に向かい何を考えているかという生の声、10代のエネルギーを全国に届けている。
https://www.facebook.com/Kujirastation

メモリアルタイルで震災の学びを継承!

岩手県宮古市
佐々木真琴（まこと）さん

行動を起こしたきっかけ

アメリカで学んだリーダーシップ

宮古市の田老地区には、万里の長城とも言われ有名だったスーパー堤防がありました。大丈夫って思った多くの方が犠牲になり、中には助けに戻った介護のヘルパーさんもいて。「なんで人のために動いた人までも」って、本当に辛かったです。その思いが行動へとつながったきっかけは、夏に参加した「TOMODACHI サマー 2013 リーダーシッププログラム」です。他の被災地の近い悩みを抱える仲間と出会い、地域貢献やリーダーシップについて学びました。他の参加者もそれぞれが行動を始め、私も具体的なアイディアに出会い、動き出しました。

エネルギーの源

昔からの「世界を変えたい」という思い

恥ずかしいんですけど、中学生の頃から「世界を変えたい」って思っていました。どう変えたいかと言うと、お金持ちとかだけじゃなくて、一般の人でもいい考えやいい想いを持ってる人がいれば、その価値観をもっと共有できる世の中になったらいいと思うんです。でも、そのためにやりたいこと、すべきことが決まってなかった。今、何か打ち込めるものを見つけてすごく興奮してます。あたしみたいな人でも何かできるんだって、見せたいんです。

行動してみて

動いたら、一つひとつ前に進んで行く

一番感じているのは「やればできる!」ということです。先頭に立って、遠慮しないで（図々しく）発言していったら、失敗もあるけど、一つひとつ前進していくんです。震災後、私たちに対して日本各地、そして世界から手を差し伸べてもらえているこの境遇は、与えられたチャンスなんだ。絶対に成功させなくちゃ、という思いが強くなりました。私が負けてしまったら田老を取り戻せない、そういう気持ちで、これからもどんどん発信していきます!

活動情報

「津波被害のメモリアル化と学びの継承」プロジェクト

宮古市田老では、過去の明治三陸地震、昭和三陸地震の被災経験がありながらも、東日本大震災でも185人の犠牲者が出てしまった。これを繰り返さないために。津波被害を、商店街などの歩道（タイル）に刻みメモリアル化することにより、津波被害の学習を行うプロジェクト。今後の震災学習や観光の一環として、そのタイルを辿り、街歩き（めぐり）などで活性ブランド化も検討中。

まだまだある! 注目の高校生プロジェクト

ISHIMO
岩手県盛岡市

岩手県の内陸および沿岸部出身の高校生5人で結成したグループ。「復興への意識について沿岸部と内陸部の差がある」という課題意識のもと活動を開始。11月に盛岡市で県内の高校生らを招いての第1回岩手県高校生交流会を実施。冬休みに行う沿岸部ツアーを企画し、来年はその結果を元に岩手内外に情報発信プロジェクトを予定。
今後も、内陸と沿岸の架け橋となってイベントや交流会を企画していく。
https://www.facebook.com/pages/Ishimo/1378828222339678

カタリバ My Project
岩手県大槌町

NPO法人カタリバが展開する学習支援事業、放課後学校・コラボスクール「大槌臨学舎」の生徒たちが、「支援される側を卒業して、大槌をつくる人になりたい」と12年秋から開始したプロジェクト。100人の町民を撮影してフォトブックを作ったり、震災の記憶を風化させないために4年ごとに立て替えが必要な木碑を作成したり。主体的に企画・資金調達・実行することを通じて、「前へ踏み出す力」「考え抜く力」「チームワーク力」を育んでいる。
http://www.collabo-school.net/myproject-about/

底上げ Youth
宮城県気仙沼市

高校生の視点を活かし、観光でを町を盛り上げる有志団体。学習支援などを行うNPO法人「底上げ」のサポートのもと、12年9月に結成された。現在、学校や学年を超えた20名あまりのメンバーが、気仙沼の魅力を学びながら発信している。今年の夏には気仙沼市の観光リーフレット vol. 1を制作。地域の観光スポットを「恋」をテーマに、大学生が主人公のラブストーリーを交えながら紹介する。現在 vol. 2の制作に取り組んでいる。
https://www.facebook.com/sokoageyouth

学生団体「まずもって」
宮城県南三陸町

南三陸町を訪れた人に震災の体験と想いを語る、高校生の語り部グループ。正式名称は「まずもって、かだっからきいてけさいん」で、これは方言で「ひとまず、お話をするので聞いてください」という意味だ。13年3月に志津川高校の田畑さんを中心に結成され、メンバーは同校の生徒を中心に10名強。外国からのゲストには英語を使って語る。活動は語り部の他にも、町のボランティアに参加したり、イベントの手伝いをしたり、志津川の名物だったトコヤッサイコンテスト（南三陸版のソーラン節）の復活も目指している。
http://mazumotte.hatenablog.com/

カフェ「　　」（かぎかっこ）
宮城県石巻市

地元の高校生約30名が休日限定で運営するカフェ。12年6月から準備を始め、11月に石巻市役所1階でオープンした。コンセプト、メニュー、空間デザイン、宣伝など、すべてをゼロから高校生主体で創り上げた。情報発信、マネージメントなどのチームに分かれ各プロジェクトを進めると共に、カフェでの接客・調理も行っている。メニューは農家や漁業者、加工会社から地域の産業を学びながら作る。大手食品メーカーと組み、ムール貝入りのレトルトカレーの開発も。
http://doorwaytosmiles.jp/

TOMOTORA
福島県いわき市

高校生が地域を案内する旅行ガイド集団。Tomodachi Travel agency の略でトモトラ。震災により観光客が減ってしまったという地元の課題を自分たちで解決すべく発足し、旅行会社 H.I.S. にプレゼンをしてコラボ企画が実現した。ツアーは東京発の1泊2日で、伝統の和紙作りやかまぼこ工房体験、フラダンスレッスンなどを通じた地元の人との交流や、同行する高校生の語る震災とその後の話から「未来に向かいわき市」を体感してもらう。10月から4回開催、参加者からは感動の声が寄せられている。
https://www.facebook.com/tomotravel

おまんじゅう作り
福島県新地町

新地町高等学校の川村花菜恵さんが企画した、地元特産の食材を利用し、住民がつくるおまんじゅうを地域の新しい特産品として全国に広めるプロジェクト。相馬市から避難してきた人々が加わりコミュニティが大きくなっている新地町で、おまんじゅう作りを通じて人と人の繋がりを深めたいという想いから始まった。高校生が中心となって仮設住宅の住民と共におまんじゅうを作り、老人ホームや保育所で配布し、地域への愛着を感じてもらうことを目指している。ゴミ拾いなど地域の活動も積極的に盛り上げる。

TOHOKU YYプロジェクト
宮城県仙台市

進路を何となく決めてしまったり、自分のしたいことが見えなかったりという、多くの高校生の悩みに向き合いたいと発足。自分の夢や本気で夢中になれるものを、人との出会いや社会的な体験を通して考え、話し合い、一緒に見つけるための団体。
テーマを持ったディスカッションや、大学生らから話を聞く会、さまざまな高校の生徒同士で交流を深めるスポーツ大会、将来への夢や志を発表するプレゼン大会などを企画、実施している。

trees
福島県南相馬市

「原発事故で大きな被害を受けている福島県相馬市および南相馬市で、風評被害と戦う一次生産者を支援するための団体。地域の農家や道の駅、商店などにヒヤリングし、地域産品の厳しい販売状況を課題と設定。自ら取材をして、生産者のストーリーとともにインターネットを通じて相馬・南相馬の産品を販売する「うまうまレストラン定期便」プロジェクトを企画。2014年4月〜の販売開始へ向けて、地域の NPO や生産者、販売店等とともに準備を進めている。

取材を終えて

今回の取材を通じて、機をつかみ行動を起こす多くの高校生達に出会った。仲間同士で励まし合い刺激を与え合い、切磋琢磨する姿。夢の実現のために悩みながらも成長し、前に進む姿。ある生徒は「若者を見ればその地域の未来が分かる」とスライドで発表していたが、まさに彼らは東北の希望そのものであった。

同時に光って見えたのは、彼ら高校生を支える大人の存在だ。今回登場した高校生の多くは米大使館の進めてきた TOMODACHI プログラムの卒業生だが、それに限らず、出会いの場や行動のきっかけを与え、時にはメンター、ロールモデルとなり内に秘めた力を引き出す大人がいる。未来をつくる若き力を花咲かせるは我々なのだと、1人の大人として思った。

ソフトの力でまちづくりを引っ張る

コバルトーレ女川の「スポーツコミュニティー構想」

サッカーを通じて町を活性化させる「女川スポーツコミュニティー構想」を掲げて2006年に設立された宮城県女川町のサッカークラブ「コバルトーレ女川」。トップチーム（以下、トップ）とアカデミー（U－18、U－15、U－12、スクール）というJクラブと同形態の組織を持ち、人材育成も行う。トップの選手は地元のスポンサー企業などで働きながら、Jリーグ入りを目指している。

設立から8年目。コバルトーレは女川のシンボル、子供たちの憧れとなった。行政からの信頼も得、まちづくりを担うサッカークラブならではの活動背景を聞いた。

「ここが原点だからな。よく見とけよ」。石巻市を一望できる馬っこ山の頂上。3年生が引退し新チームとなったU－15の初練習で、監督の中島礼司さんが選手たちに語りかけた。視線の先には大きな仮設住宅団地と、津波被害の爪痕の残る石巻市街が。住宅に取り囲まれるように彼らの練習場、コバルトーレトレーニングパークがある。

馬っこ山へのランニングの後は練習場に戻りトレーニング。疲れた表情を見せる選手に中島さんが声をかける。「試合の後半、相手にボールを奪われた時の動きだからな」。きつい練習をただやらせるのではなく、なぜするのかを伝える。背景にあるのは、サッカーを教えるだけでなく、人間として育てるという意思だ。「サッカーは人生。整理整頓ができないとか、ちゃんとしていない人間はサッカーにもそれが表れる。この先サッカーをやめたとしても、一人の人として通用する人間を育てたい」。

Jリーグでプレーした経験を持ち、チームが活動を休止した震災直後の1年間は長崎でサッカーを続けながら女川の状況を全国に発信した中島さん。「コバルトーレがあるから、自分がサッカーを通じて知り合った全国の人に女川のことを知ってもらえる。それに、町の人もコバルトーレを応援することでつながれる。普段はしがらみがある人同士も、一緒にサッカーを応援すると仲間になれるんです」と、コバルトーレが地域と全国、そして地域の人同士をつなげる媒体となってきたことを実感している。

ごみ拾いからの出発

ゼネラルマネージャーの近江弘一さんは石巻出身。ウエットスーツ製造販売会社の創業役員として東京や横浜で活躍していたが、父親の死を契機に地域に貢献する生き方を志向し、2006年にコバルトーレ女川を立ち上げた。

トップとU－15から活動を開始したが、トップはよそ者の集まり。選手は時間さえあればチームのジャージを着て町のごみを拾って歩いた。お祭りの手伝いや子供たちとのふれあいをコツコツと続け、また、地元の人に交じって水産加工会社などで働きながら、町民との信頼関係を築いた。2008年にはU－18を立ち上げ、生徒が減ってサッカー部の活動ができなくなった女川高校から部員を受け入れる選手指導提携を締結。さらに教育委員会の指導のもと公共施設を利用できる施設利用提携を結び、公共と役割を相互補完しながら活動している。今では女川町長からも「今度、祭り来れますか?」と声をかけられる。

100年後の地域のために

「地域貢献を考えると、子供に行き着く」と近江さん。コバルトーレでは、子供たちが様々な経験、考え方をできる場として、サッカースクールや幼稚園の巡回指導を行っている。「サッカーをしていると、みんなが本気で笑ったり、怒ったり、泣いたりする。チームの中に表現を引っ張る子がいて、個人で強くなる前に、一つの塊として強くなろうとする。だからスポーツって面白い」。

ハードを造った後でソフトをつめこむのではなく、ソフトが先にあってそれに追いつく形でハードができるのがまちづくりのあるべき姿、というのが近江さんの考えだ。コバルトーレは、女川のまちづくりを牽引するソフトの役割を担っているのだ。

クラブは、2017年のJリーグ入りを目指している。今すぐ上へと考えないのには理由がある。「女川の復興計画が進み、町の形ができてくる時に一緒に上がりたい。2016年に、町に新しい競技場ができる計画がある。そこで昇格を決めて、Jリーグに参入する。それが地域のためにもいいし地元の人も喜ぶと思う」。

女川町からは100年続く地域クラブになることを期待されている。近江さん自身も「自分たちは種をまいているだけ。僕らが生きているうちに成功するとは思っていない。次の世代が、そして町が、温めて成功させてくれるクラブを目指している」という。100年先を考え、短期的な強さよりも、町とともに歩むことを重視しているのだ。

文化をつくり、終着の町に人を集める

日本全国、さらには海外を飛び回る仕事からコバルトーレに転じた近江さんは、「女川は終着の町。そこに一番光るものがあることが大事」という。牡鹿半島という地理的な先端に位置し、交通の終着地でもある町に魅力があれば、周辺地域にも観光事業が波及する。

コバルトーレはチームの活動に加え、今後、地域に人を呼ぶための新しい事業を構想している。

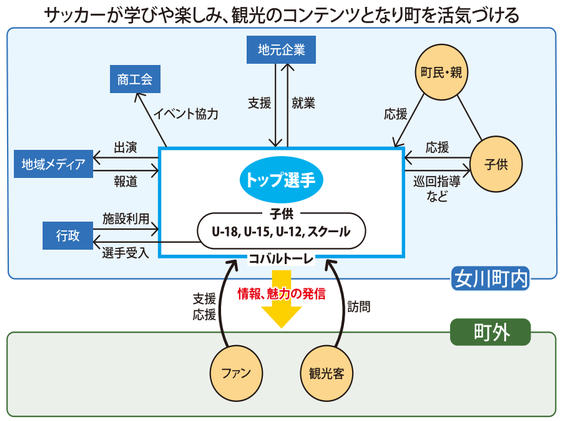
一つはスポーツ宿。女川町の持つ施設管理を受託し、施設を活用してスポーツ合宿を誘致する。もう一つは私立高校の設立。外から来た若者が3年間でも町民になれば、人口減が続く町にとって大きな財産である。「宿や学校も、コバルトーレを通じて全部つながるんです。一万人の町にJクラブができたら、県外から人が来るようになる。スポーツ宿ができたら、日本一の朝ごはんを提供して、宿泊した子供たちには魚の食べ方から教える。滞在中に牡蠣漁の体験だってやってもらう。コバルトーレは文化なんだ」。

近江さんには、自信を持ってそう言える理由がある。「元々縁のなかった選手たちが家族を持ってここに住んでしまっていること、これが文化という証拠」。トップの選手23名のうち17名までもが県外出身者だ。

日本各地から集った若者は、子供たちの憧れとなった。教育関係者によれば、女川の中学生は「将来コバルトーレの選手になりたい」と口にし、小学生たちはスクールに通っていることを得意げに話すという。コバルトーレ卒業生2名が講師として小学校に勤務するなど、地域を支える人材も輩出している。

「すんごく楽しみなんですよ、この先が。ヨーロッパで100年続いているクラブ（※）だって、はじめはゼロだった。100年後に成功があるとしたら、コバルトーレは7年やっているから、そこに確実に近づいているんです」。教育、観光、文化といったソフトの面からまちづくりを牽引する、女川ならではのサッカークラブ。その可能性は、まだまだ広がりそうである。今後のコバルトーレと女川の町が楽しみだ。

※マンチェスター・ユナイテッド（1878年創設）やFCバルセロナ（1899年創設）などヨーロッパの伝統クラブは、地域のブランド価値を上げるだけでなく、その歴史を住民と共有し、アイデンティティに深く関わる存在＝文化となっている。



U－15を率いる中島さん（左・神奈川県出身）とコーチの五十嵐さん（北海道出身）

仮設住宅のそばのトレーニングパークで、子供たちがボールを追う

選手たちはイベント参加やごみ拾いなどの活動を通じて、地域に溶け込んだ

「コバルトーレの資産は若者」という近江さん

フォトエッセイ

東北のいま

［21］

自然と笑顔で健康寿命を長く

北原ライフサポートクリニック東松島

写真・文＝岐部淳一郎

ドアの向こう側で楽しげな笑い声がもれ聞こえる。

…地域公民館の一室。温かい光が差すこの部屋で、6人の参加者が身体を動かしていた。「では、頭の上に両手を伸ばして、片腕ずつ、背泳ぎするみたいに後ろに回しましょう」と前に立った若い男性がお手本を見せ、6人がそれに習う。雑談交じりの楽しげな身体の運動だ。

参加者の一人から「最近、足がつりやすくて」と声があがると。「じゃあ、ちょっと足指とふくらはぎを見てみましょうか」とその男性は一人ひとりの足の具合を見始める。彼は、リハビリテーションの専門家・理学療法士の喜屋武寛昌さん。北原ライフサポートクリニック東松島のスタッフとして、この日、集団運動教室の講師を務めた。「加齢とともにと身体のバランスが少しずつ取れなくなってきます。よろけやすくなるわけですが、本来であれば反射的に先に足が出て身体を支えます。この反射が衰えると転んで、それがケガにつながってしまいます」。喜屋武さんは、参加者と顔を合わせ、身体を動かし、雑談の一声から身体のシグナルを聞くと、参加者に合ったメニューを組み立てた。

◇

北原ライフサポートクリニック東松島は、東京に本院を構える医療法人社団KNIが、去年の2012年12月1日にオープンしたクリニック。同院が八王子で実践する医療を軸とするまちづくりを評価した東松島市が要請し、それに応えた。「東松島みらいとし機構・HOPE」の組織メンバーとしても医療をツールにしたまちづくりを模索している最中だ。

クリニックには現在、看護師と理学療法士が1名ずつ常駐し、リハビリテーション支援事業や訪問看護、訪問リハビリテーションなどの事業を行っている。本院からドクターが派遣される土曜日には診療も行う。

多くの方は「病院とは病気を治してくれる場所」と思うわけだが、同院が考える医療は、治療し、薬の処方を出すだけの場所ではない。この日の集団運動教室のように、日常の運動を促すだけでも、高齢者のケガや病気のリスクを下げ、健康寿命を長くすることができる。東松島の豊かな自然の中でからだやこころのメンテナンスにつながるプログラムを行い、自己免疫力を高め、笑顔で健康に過ごせる時間を増やし健康をより継続させることも役割の一つと考えている。

同院は、強い理念を持ち明確な目標を掲げて、長い1年を過ごした。常駐の医師を確保できず、本院から医師が派遣される土曜日にしか診察ができない状況が続くなどの課題を抱えながらも、看護師や理学療法士でも担える医療を実践してきた。現地スタッフの努力の結果、顔なじみの人と交わす言葉が少しずつ増えてきた。常駐スタッフの理学療法士の野澤雅美さんは、しばらく東京に戻り、東松島に帰って来た時、「急に東京に帰っちゃって…」と声をかけられた。自分のことを気に留めてくれていたのだと思えるちょっとした一言。その一言の芽生えた関係を嬉しくも思うとともに、期待に身が引き締まるのだ。

おいしい復興

株式会社八木澤商店　みそパンデロウ

味噌がミソ。どこか懐かしい、ふわとろ半熟カステラ

2013年「岩手県ふるさと食品コンクール」最優秀賞受賞の逸品。是非一度食べてミソ。

「コラ！お店の物で跳ねたりしないの！」。幼い頃連れられていったホームセンターにて、柔らかそうなソファーを見つけると一目散に飛び込んではよく母に叱られたものだった。

八木澤商店の「みそパンデロウ」を見た瞬間、初めて見た気がしなかったのは、そんな少年の日の記憶とシンクロしたからに違いない。ふわっふわのスポンジに思わず飛び込みたくなる衝動を必死に抑えつつ、そーっと口へ運んだ。岩手県一関市にある館ヶ森アーク牧場の自家製オーガニック小麦粉と新鮮な卵がベースとなっているスポンジに、特製味噌を加えているのがミソ。ほのかな香りとしつこくない甘さに魅了され、うっかり丸ごと食べてしまいそうになるから要注意だ。

こだわりの醤油や味噌などを製造している八木澤商店がスイーツを作ったのは「自慢の味噌をもっとたくさんの人に気軽に楽しんでいただきたい」という想いから。ポルトガルの伝統的なお菓子パンデロウをどこか懐かしく感じるのは、そんな彼らの温かな想いと、日本の伝統的な調味料である味噌の風味のせいだろう。他にもWebサイトにはじっくり熟成させた醤油「ゆっくりねのんびりと」など、親しみやすい名前の商品が並んでおり、ギフトとしても喜ばれそうだ。

「おいしい復興」の記事を執筆し始めて約1年。よく人は「甘いものは別腹」と言うが、鏡の前で自分の腹を眺めながら、本当に別の腹になってくれることを切に願った。（K）

気仙沼で新カフェ点灯！ 俳優の渡辺謙さんがプロデュースするカフェk-portが気仙沼にオープン。地元の酒蔵「男山本店」を訪れるツアー客を自らもてなした。

地域連合で新たな名物誕生へ

農家とシェフがつくる100％いわき産のスムージー

福島県いわき市で、市内の農家やシェフ、学校などが協働してつくる新しい地域商品が誕生した。Hyaccoi（ひゃっこい）と名付けられた商品は、市内で自然農法により農業を営む「ファーム白石」の野菜をベースとしたグリーンスムージー。野菜のほか、製造に使用する豆乳や乳酸菌、氷などはすべていわき市産とし、同市内で1日1組限定レストランを経営するシェフの監修のもとで商品化された。

加工品を開発する意義を、「規格外の野菜でも活用できる」とファーム白石の白石さんは話す。販売量を増やし、地域内で風評被害により未だ苦境に立たされている福島の農家の売上確保へつなげたい考えだ。今後、地域における飲食店やイベントを中心に販売していく。新たな地域の名物となり、福島の農業復活モデルの一つとなると期待したい。

岩手県釜石市

行政―病院が連携して人材募集を仕組み化

釜石市は22日、市内で働く看護師の募集を目的としたセミナーを東京都内で開催。釜石市の復興の現状や、市の医療現場や勤務先の病院の情報などを説明した。これは人手不足に悩む病院の課題解決へ向けて、市が外部の専門家と連携しながら広報協力を行うもの。震災前より役場内に窓口を設置し医療における地域内連携を進めており、また復興においても積極的に外部団体との連携を行っていた同市ならではの取り組みと言える。

特徴は、1度のセミナーに終わらせることなく、継続的に人材募集が効率化されるための仕組みをつくっていること。現場をイメージできる情報を掲載した専門のウェブページを設置するとともに、SNSのファンページも立ち上げ、釜石の魅力や関係者インタビューなど日々の情報発信を続けている。また仮設住宅空き室の無償貸し出しや車のリース（検討中）などの手当も行政側で用意した。

地域内外の官民が連携して取り組み。人手不足に悩む他の市町村でも参考にできるものにしたいと釜石市担当者は抱負を語った。

ホームページやSNSページでは親しみ易い雰囲気で現場情報を掲載している

編集後記

第30号。ここまで続けることができたのも、支援・応援・協力くださった多くの方々のお陰と御礼申し上げたい。そして我々を感動させ奮起させ続けてくださった現場の皆さんの努力と汗に、改めて敬意を表さずにはいられない。

創刊当時は、多忙な皆さんの情報発信をお手伝いするのが目的だった。それから3県の共通課題解決を意識し、良い事例を紹介することでノウハウの共有や協働が進むことを願った。21号からは各地域が注力する町づくりに関し、東北以外の地域からも先進事例を探すようになった。

今号の特集で取り上げた宮城県の女子高生、三品さんが制作した「ラブ♡セン」という動画を観た。8分半の間、じわじわとこみ上げる感情があり、観終わった時、我慢できずに涙が溢れ出した。震災時には中学生だった彼らが今、自らで考えたプロジェクトを次々に生み出している。彼らの笑顔が、これまでと、今と、これからの東北を象徴しているように感じた。

創刊当時、本紙の大特集が高校生で埋め尽くされるなど想像できなかった。東北には確実に新しい風が吹いている。その風はきっと、未来の日本を変えていく。我々も、あるべき姿、役割を模索しながら、前へ進もうと思う。（編集長）